

## 日本人留学生の学習パターン

ヘレン・マリオット

ただいまご紹介に預かりました、モナシュ大学のヘレン・マリオットでございます。

今日は、日本人留学生の学習パターンについての研究発表をさせていただきたいと思います。

現代社会において、教育の分野は人と人が交流する場として、主要なもの一つであり、自国での教育を終了した後、海外に出て、新たな環境で教育を受ける学生が増えてまいりました。学問的にみると、このような留学生が、第2言語で、しかも異文化という環境で、大学で教育を受け、研究を進めるための能力、つまりアカデミック・コンピテンスを発達させていくうえで、さまざまな問題点が観察されます。主要な問題点としてアカデミック・コンピテンスは文化によってどのように異なるのか、留学生にとって、アカデミック・コンピテンスのどのような点が問題になるのか、そして留学生はどうやって問題を乗り越え、アカデミック・コンピテンスを獲得していくのか、以上の三点があげられます。

アカデミック・コンピテンスという概念は Saville-Troike (1984) が、「学生が高等教育を受けるために必要とする知識と能力」という意味で初めて用いたものです。後に他の研究者がより広い意味でこれを用いるようになりましたが、私もこの研究で アカデミック・コンピテンスの概念をより広く解釈して応用いたしました。Adamson (1993) は、一般的な英語の能力、教育内容についての背景知識、効果的な学習スキルを含むものとしております。私はこれに、Hymes (1968, 1972) が提唱しているようなコミュニケーション能力、つまり、言語能力と社会言語学的能力を加えたいと思います。さらに、Neustupny (1978, 1998) が Hymes のオリジナルモデルを拡張・改訂する中で、新たに主張した、それらの能力を実際に使用しては修正を重ねていく「運用能力」、も加えたいと思います。

次に研究方法について簡単に述べさせていただきますが、この研究では、オーストラリアで学ぶ日本人大学生の事例を分析いたしました。オーストラリアの大学で学ぶ日本人留学生のうち、大学付属の英語センターではなく、大学の正規のコースを履修している学生は次の三つのカテゴリーに分類できます。一つは通常のプログラムを履修する学部生、一つは修士課程や博士課程に在籍する大学院生、そして、もう一つは日本の大学から半年か1年の期限で勉強に来ている交換留学生、です。

データは、オーストラリアのモナシュ大学で学ぶ、日本人留学生の事例研究を基にしたもので、この事例研究の調査は二部に別れておりまして、まず、日本語によるアンケート調査と、インタビューの二つです。また、数例ですが、教師へのインタビューも行いました。

この発表では、時間の関係上学生のバックグラウンドについては省略させていただきます。

まず、留学生がいかにして大学レベルの英語力を習得していくかを研究する準備段階として行いまし

た、現在海外で学ぶ日本人留学生のタイプについての調査結果を簡単に紹介させていただきます。私は日本人留学生達がどのような目的を持って留学してきたのか、海外に滞在することによって得られる利点をどのように評価しているのかについて調査を試みました。

被験者は25名で複数解答としましたが、ほとんどの学生が教育的あるいは社会文化的性質のものか、就職に関連した目的をあげております。教育上の直接的な利点としては、大学院生の場合は修士課程の修了に関連するものをあげており、交換留学生の場合は日本に帰ってからの学習にメリットがあるからというものがございました。オーストラリアでの、特に大学院レベルでの専攻の大きなカテゴリーとして日本語教育の分野がありますが、これは、もう一つの主要な目的である就職に対して有利だと関連づけているものが見られました。次に、社会・文化的目的では、半数以上が海外で滞在するという状況に関わるもので、例えば海外での生活を体験するとか、異文化について学ぶとか、海外の学生と出会うというようなものです。より日本に焦点を当てたものといたしましては、日本を異なる目で見られるようになりたい、などというようなものがございました。最後に、教育的目的の一つでもあります、「英語の上達」が最も多くの学生に共通した目的で、半数の学生がこれをあげており、三つのグループに共通しておりました。

次に、それまでの留学で得た利点について質問いたしますと、留学生は先程の目的を述べる時よりも具体的に答えております。学生達のあげた留学の利点は大きく三つのタイプに分けられます。社会文化的利点・学問的利点・社会心理学的利点の三つです。まず、社会文化的利点として、留学生たちは三グループとも、日本とオーストラリアの、あるいはこの二国と他の国の、文化の違いをより深く理解できるようになったと答えております。また、少數ですが、オーストラリア、あるいはオーストラリア人、また、日本や日本人としてのアイデンティティーについての理解が深まったと答えた留学生もおります。それから、教師や友達とのネットワークができたことも、研究していく上で価値あることとしてあげられております。次に、大学院生と交換留学生は、学問的な利点として、専門的な知識が増えたことと、日常会話だけでなく、学間に必要な英語力も向上して、論文が書けるようになったことをあげております。最後に日本にいるオーストラリア人留学生に対する研究でも同様の結果が出ておりますが、日本人留学生も留学中に得た、社会心理学的な利点について触れております。これらは、独立心や責任感が生まれたこと、海外で暮らす大変さが分かつてよかったです、努力すれば報われることに気づいたこと、などとなっています。

次に、大学で必要とされる英語力の発達についてですが、これまでみてまいりましたように日本人留学生にとって、大学で必要な英語力を身につけることは、唯一ではないにしても主要な、直接的・間接的な留学の目的となっております。

留学生たちは、海外の新しい環境で勉強を始めるに当たって、様々な困難にぶつかります。これらの困難を留学生自身までが、あまりにも単純に、語彙が少ないとか、文法能力が弱いなどといった狭い意味での語学力の不足のせいにして、英語学習コースに逃げ戻ることが最良の方法と信じ込んでしまうケースが見られます。けれども、大学でのコミュニケーション場面では、言語能力はもちろんのこと、内容的知識・学問的知識に加えて、書くとき、話すときにはさらにコミュニケーション上の規則が多数

必要とされます。つまり、留学生が海外の大学でうまくやっていくためには、様々な種類のきまりを習得していかなければならないことになるわけです。

教育機関では特殊なディスコースのタイプ、つまり、「ジャンル」が用いられます。ジャンルというのは、いろいろな専門分野で使われている概念ですが、英語の第二言語習得の研究においてもよく使われております。これは、一言で言いますと学習活動のタイプと言うと分かりやすいかもしれません、講義、文献講読、エッセイや小論文、といったようなものが「ジャンル」に相当いたします。こうした、知識や学習したことを表現し、伝達するために社会的に適切なディスコース、つまり「ジャンル」が存在するわけです。教育・学習の形式はその時代によって異なるものですが、また文化によっても大きく異なってきます。そのため、学生たちは自国の学生生活に馴染んでいても、他の国では基本的な多くの事柄が違っていることに気づくことになります。これは、書くこと・話すことに対する期待や、できあがったものの形式、あるいはそれに対する社会の価値観などが留学している国と自国とでは、たとえ、同じ名前であっても内容が異なることがよくあるからです。大学でのジャンルはこのような社会言語学的現象を反映したものであり、国によって類似していたり、また大きく異なっていたりいたします。つまり、大学という環境内でのジャンルには、コミュニケーション上、社会文化上、特定の方式があり、そこに参加するものはこれをよく知っておかなければなりませんし、異なる環境から来て学習を始めようとする留学生たちは、これらの新しい方式を習得しなければならないわけです。

マクロな観点から見ますと、この研究で日本人留学生が最も深刻な問題としてあげておりましたのは、論文その他を「書くこと」、「リーディング」と呼ばれる文献講読、それから「講義理解」に関するこことでした。その他の問題点としては、コンピュータの使い方、事前の文献講読を含む大量の授業前の準備や宿題、クラス内での発表、チュートリアルでのディスカッションなどがあげられております。この研究では、こうした問題について、学生たちの語学力不足や学問的知識の不足が原因なのか、あるいはオーストラリアの大学でのジャンルや社会文化的な習慣に不慣れなことが原因なのかを特定することが目的ではなく、むしろ、学生が留学中に、新しいジャンルに関するコミュニケーションルールなどどのように習得していくかを明らかにすることを焦点としております。

オーストラリアと日本とでは、その科目履修のしかたそのものに根本的な違いがある学部が多いようです。例えば、オーストラリアの文科系の学部は3年制ですが、日本より科目数が少なく、一般に1年生は各学期ごとに4科目、つまり、1年間で計8科目を履修いたしますが、普通この履修科目数は学年が上がるにつれて減ってまいります。つまり、1科目の単位数が多くなり、それだけその科目について深く学習することになるわけです。学部のレベルでは、文科系のほとんどの科目の場合、語学のようないくつかの特殊な科目を除いて、主なジャンルといたしまして、「講義」、これはあとで詳しくご説明いたしますが、日本の大学にはない「チュートリアル」、文献講読にあたる「リーディング」、「小論文」、「試験」などがございます。このようなスタディ・ジャンルの名称のいくつかは日本の大学でも普通に使われてはいますが、非常に文化的に特有であり、説明を必要といたします。今述べた、主なジャンルの他にオーストラリアでは二次的ジャンルといたしまして、サブジェクトアウトライン

と呼ばれるその科目についての要項と、学期の終わりに実施される、学生がその科目について評価するアンケート用紙がございます。

では、オーストラリアで勉強する学生が経験するさまざまなジャンルについて順を追って、ご紹介いたします。まず、学部生も大学院生も、各科目の開始時にその科目の担当者によって作られたサブジェクトアウトラインと呼ばれる詳細な科目要項を受け取りますが、これには通常、学習内容と講読文献の週ごとのスケジュール、小論文と試験についての詳細、評価の内訳やその他の細目が記載されています。日本でも、シラバスということばは使われるようになっていると聞いておりますが、それはサブジェクトアウトラインとは少し違うようです。

講義には、その科目をとっている学生全員が一斉に出席いたします。講義の形式は比較的日本の講義に近いかもしれません。教師は、講義用に用意した原稿にもとづいて主に口頭で一方的な講義形式で授業を進めることもありますし、OHP やビデオなど、最近ではコンピューターなど、その他の補助教具を利用したり、講義に関連した資料を配ることもございます。その週の講義のトピックは、通常、学期の初めに前もってサブジェクトアウトラインに提示されております。この講義というジャンルでは、教師が主に話す役割を担っていることになりますが、学生も時には質問をしたり答えたりするよう促されます。

チュートリアルは、その科目を履修している学生が小人数のグループにわかつて行う授業で、以前は8～12名の学生で構成されておりましたが、最近は、財政上の制約から学生数15～25名というのが標準になってきております。学生は、それぞれの科目に対して講義とチュートリアルの両方に出席するわけです。チュートリアルのやり方は、教師によってかなり異なっていますが、原則として学生が主導的な役割を担います。一般的に一人もしくは二人の学生が「チュートリアル・ペーパー」と呼ばれる小論文を書くように割り当てられ、それにもとづいて「口頭発表」をいたします。このような活動が、出席者の間での討論へと自然に発展していくこともありますし、あるいは、教師のほうからグループ全体を討論へと発展させていくこともあります。チュートリアルのトピックは、その週の講義と関連づけられ、講義内容の理解を深めることを意図しているのですが、このタイプのジャンルは日本の大学にはないようです。日本の大学でこれにもっとも近いものはゼミだと思いますが、ゼミというのは、重要な独立したコースであり、講義の補足として設けられているのではありません。また、日本には「演習」というジャンルもありますが、これも講義の補足ではない点でチュートリアルとは異なっております。

さて、どの科目でも学生は決まったトピックに関連するものを読むことが要求されますが、これはリーディング、つまり文献講読というジャンルになります。科目によって、講義とチュートリアルでは別々の文献リストが渡されることもありますし、共通のリストが渡されることもあります。こうした科目のための講読文献は、通常、サブジェクトアウトラインに前もって記されております。週毎に読まなければならない文献の数は科目によって異なりますが、私が担当しております科目の場合は、毎週、書籍で

あれば三章、論文であれば三つ程度読むことを要求しております。

次に「小論文」というジャンルには、先程申しました、「チュートリアル・ペーパー」や論評、研究プロジェクトなど、学生が「書く」という作業を行う、色々なサブ・ジャンルがございます。しかし、多くの文科系の科目では、小論文が最も典型的な評価のための「書き」の課題となっております。小論文のトピックの決め方は科目によって異なります。書かなければならぬ小論文の数は科目によって異なりますが、一科目につき二つ程度というのが一般的なようでございます。通常、講義担当者がサブジェクトアウトラインで小論文のトピックを指定しておりますが、学生はいくつかの中からトピックを選択する機会が与えられていることもございますし、学生自身が小論文のための課題を自分で決めることもあります。言うまでもなく、小論文のトピックはその科目で扱うトピックに関連するものです。小論文を書くために、学生たちが指定された文献リスト以外の資料も読まなければならぬこともあります。

日本人留学生は日本の大学では、レポートと言うと、一般的に書籍や教科書の一部分をまとめることがあったと言いますが、オーストラリアの小論文では対照的に、関連する文献を批判的に読み、それをふまえて論じることが求められます。文科系の学部や大学院では現在、単位数によって、小論文の長さや、試験の長さが規則で一定に定められております。私の調査では日本人留学生は、日本の大学では小論文はかなり短く、トピックも授業中にその場で指定されることが多く、また、その小論文が学生に返されないこともあると述べておりますが、オーストラリアでは成績と共に詳細なコメントをつけて必ず学生に返却されます。

「試験」は日本と同様小論文とともに、個々の学生に対する評価を決める主要な要素の一つでございます。学生は普通、試験に資料を持ち込むことは許されません。試験の形式は、小論文から記述式、多肢選択、など様々ですが、大学院レベルでは、試験ではなく、全て学生が書いた小論文によって評価されることもございます。これは修士論文（major thesis）を書かずに修士を取る場合です。（もちろん、修士論文だけ、それから論文執筆といくつかのコース（つまり単位）履修によって、修士を取る場合もございます。）

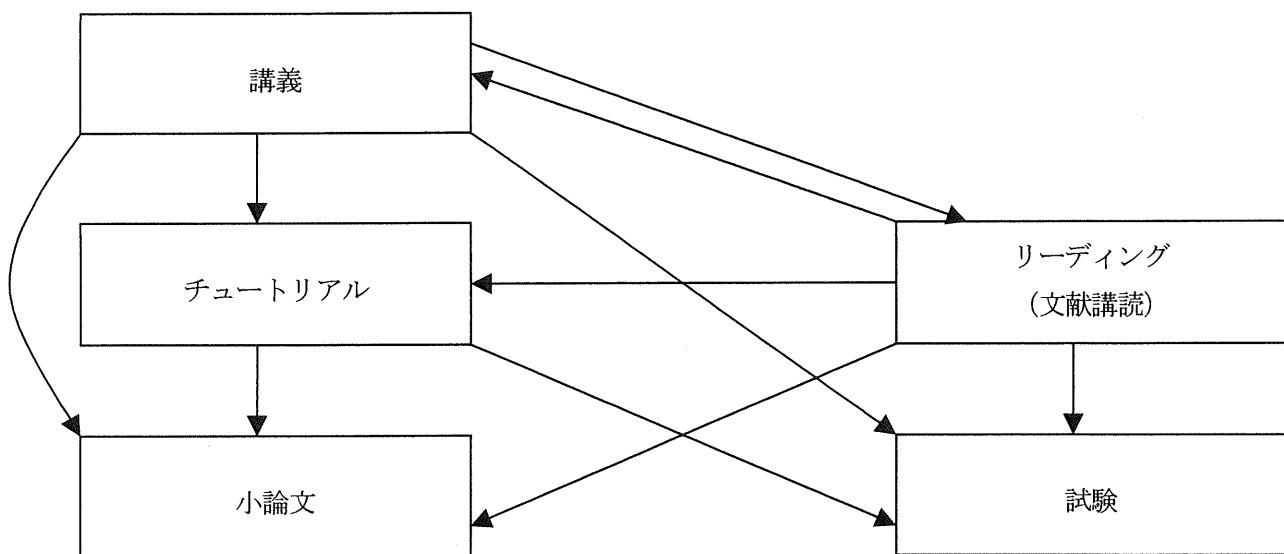
モナシュ大学では評価事項の計画実行については、非常に厳格でございます。サブジェクトアウトラインに、全ての評価の詳細を添付し、各学期の初めに学生に配布しなければならないだけでなく、教務スタッフが学部の便覧と照合して、この評価の詳細が学部で決定された厳しい要求にみあっているかどうかを確認いたします。このようにして、学生は各科目でどのように成績がつけられるか、様々な評価要素がどのような比重を持っているのかを事前に知ることができます。これと比べまして、日本の学生は教官たちがどのように最終的な評価をするのか、必ずしも知らされていないと言います。これは、日本とオーストラリアの両国の大学のシステムを経験なさったネウストプニー教授が指摘しているらっしゃいますように、大学内の権威が個々の教授陣の掌中に残っていると思われる日本と比べて、オーストラリアの教授陣は、評価や他の指導業務などに関してかなり権威が弱くなってきたため

と思われます。

さて、前に述べましたように、学期の終わりに、学生は、自分が受けた授業に対する評価をアンケート用紙に記入し、担当教官はこのフィードバックをもとによりよい科目及び授業内容にするよう求められております。モナシュ大学の日本人留学生は、日本の大学でこのような、学生から見た授業の評価に関するアンケートに記入したことはないと言っております。

ここで今まで申し上げました様々なジャンルのつながりを、学部を例にとって図に示しますと、このようになります。

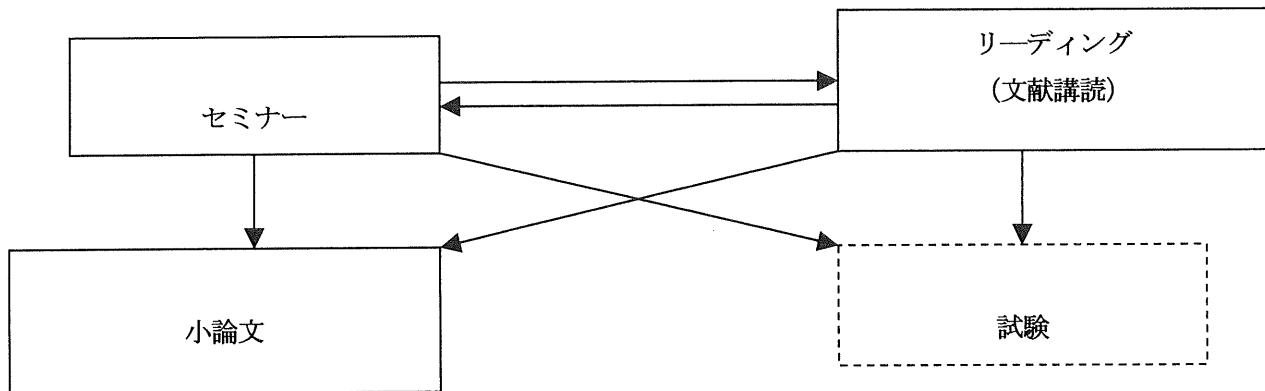
図1 学部の主要なジャンルのつながり



各科目の構成は、原則として週2時間の講義とこれに伴う1時間のチュートリアルです。週毎のリーディングは、自分が書かなくてはならない小論文はもちろん、講義とチュートリアル両方に関連したもので、講義、チュートリアル、リーディングの理解度は全て期末試験でテストされ、最終的な評価は、通常、小論文と試験の成績を併せて考慮されます。

次に、大学院の主要なジャンルのつながりを紹介させていただきます。

図2 大学院の主要なジャンルのつながり



学部レベルと同様に、各科目のそれぞれのジャンルは共通のトピックでつながっていますが、ここではリーディングがより重要な位置を占めます。また、この「セミナー」ですが、大学院になりますと、クラスのサイズはたいてい小さくなり、セミナーという公式名称で呼ばれるようになります。このセミナーの内容と、特にリーディングは試験でテストされますが、試験のない科目もございます。そして、評価は、小論文だけ、あるいは小論文と試験の総合評価に基づいて、厳しく行われます。修士課程の学生は、必要単位を修了するために通常2年間に8科目を履修いたします。

ここまで述べてまいりましたジャンルは大きく分けますと、書き言葉のジャンルと話し言葉に関するジャンルがございます。話し言葉に関するジャンルでは、日本人留学生はどのレベルの学生も講義を理解することの難しさを体験しております。ノートを熱心にとること以外に、学生がよく用いますのは、特に留学して最初の学期には可能な限りテープに録音して、後で聞き直すという方法でした。中にはその科目の履修を途中で放棄するという後ろ向きな方法もあげられておりました。学部レベルではチュートリアルは留学生にとって新しいジャンルであり、このようなクラスでのディスカッションに参加することに難しさを訴える学生もかなりおります。大学院レベルの学生にも、ディスカッションやその他の話すジャンルを含む学習活動は難しいようです。多くの学生が参加せずに、ただ出席して静かに聞いているだけと答えております。このようなクラスでの討論に参加するためには、週毎に課される文献資料を完全にではなくとも読むことが最も大切なことだと、ほとんどの留学生は述べております。ここで、申し上げておきますが、もちろん、討論に参加する学生がまったくいないわけではありません。

一方の、書き言葉のジャンルに対処することも、全ての留学生にとって難しいことです。学生の英語能力と、それまで全く馴染みのない内容について学習していることなどを考え併せますと、週毎に割り当てられる文献を全て読むことは難しいようです。留学生たちはこの点に関して、様々な方法を用い

ていると述べております。たとえば、クラスの前に一部分だけ読んでおいたり、全体にざっと目を通したりしております。また時には全く事前の必読文献を読まないで出席することもあると言います。それでも、留学生たちは一様に、オーストラリアの大学では、日本の大学よりもリーディングが学習の過程においてもっとも重要な位置を占めていることを認識し、日本にいた時よりもよく文献を読むようになったと答えています。

試験は全ての学生に馴染みのあるジャンルですが、資料を試験に持ち込まないことに慣れない学生もあります。小論文やその他の「書く」というジャンルは全ての留学生にとって、最も深刻な問題の一つです。このジャンルもまた学生達自身がよくわかっているように、日本の大学よりもオーストラリアの大学ではより重要な位置を占めています。小論文は大学院レベルではより長くなり、種類も増えてまいります。各科目につき、通常一つか二つの書く課題が課されますので、留学生は全体の課題の総量は非常に重いと訴えています。教科書の一部分を要約することは日本でもよく行われてますが、論文を理論的に構成すること、何人かの異なった筆者の観点を分析評価するなどして、考察をより深いものにすること、参考文献の書き方の手順に従うことなどに学生がうまく対応するためには、多くのストラテジーが必要となってまいります。大学院生の中には、入学前に大学付属の英語センターで行われている予備コースをとり、論文の書き方の指導を受けてきた者もおりました。また、大学院生と交換留学生のうち何人かは最初の学期に、文科系の学部によって開かれる論文の書き方や学習方法についての特別な講座に出席していました。それにも関わらず、全ての学生が一様に書くことに関しては、さらに多くの運用面でのストラテジーを取り入れなければならないと認識しております。このため、学生は英語の原稿を見てくれる友達を捜し、クラスメート、友人、寮の仲間などの助けを求めるのが普通です。けれども、これはいつもうまくいくとは限りません。友人の修正してくれた原稿が適切でない場合もあるからです。例えば、使われている言葉があまりにも口語的で論文にそぐわないものであったり、構造の問題が無視されてたりする場合も多いのです。1998年の追跡調査では、この友人による修正のより詳細なデータを収集しておりますので、これについては近々分析するつもりでおります。

結果として、留学することによって大学で必要とされる英語力、またこれに伴う学問的知識が向上しただけではなく、大学という高等教育機関の一員となることによって、外部にいることによっては分からぬ知識を獲得できていることから、海外での学習は日本人留学生にとって大変有意義な経験であることが分かりました。また、大学の様式は世界共通であろうという予想に反して、意外にも大学とその周辺事情は非常に文化的に特有であり、このため、文化によって著しい異なりを見せていることがわかって、興味深い研究結果が得られたと思っております。

それでは、以上で日本人留学生の学習パターンについての研究についての発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。